

第1問次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

〔1〕 芸能に登場する鬼は、女に対して特別な関心を寄せているものが多い。女を奪い、女をさ
いなみ、女に憧（あこが）れ、とかく女を媒介として、この人間の世との葛藤（かつとう）に一段の
花をそえているといえる。どうも、鬼と女というかかわりを考えてみると、この場合女は、鬼
という怪異の世界と人間の世界とを結ぶ一つのやさしいかけ橋の役割を負っているように思わ
れる。

〔2〕 鬼には、巨大さや、怪力や、血なまぐさい惨虐のイメージが強いが、時にはそれ以上に花
や、美女や、笛の音などが似合わしいと思われるのは、怪異としての鬼の内がわが、じつはた
えず、こうした抒情（じょじょう）的なやさしさや、人間的ななつかしさ、美しさなどに脆（もろ）
い、憧れの情を抱いていることの証拠ではあるまいか。

〔3〕 そして、表現としての鬼と女とは、最も遠い対極でありながら、内面的な働きという一つ
の円環の中では、思いがけぬ近さの背中合わせの距離になっていて、極から極への異質な遠さ
は、じつは一瞬の飛躍によってたちまち変質のとげられる表と裏の関係であったりするのだ。

〔4〕 理屈っぽい方になってしまったが、私はそうした鬼と女のかかわりから、さらには女
から鬼への変貌（へんぼう）のドラマに関心をもつ。

〔5〕 A 一匹の鬼がひっそりと女の貌（かお）をして人間（じんかん）にひそんでいることは、一方
からみれば哀（かな）しいことではあるが、一方からみれば、またたいへん怖ろしいことであるに
ちがいない。たとえば『今昔物語』は、山深く住む狛師の兄弟の母が、いつのまにか鬼になっ
ていて、子を食おうとしたという話を伝えている。母という最も安心できる、日常そのものの
代表のような部分が、いつのまにか怖ろしいものに変質しているという、このこわさは、こと
の異様さ以上に示唆的で、日常的な安心や油断の中に思いがけずしのびこんでいる敵意や、目
に見えず変質しているものの危うさを感じさせる。鬼の存在がほんとうに怖ろしいのは、山や
島などに要塞をかまえている挑戦的な鬼よりも、こうした日常の中に溶けこんだ形で存在する
敵意や（ア）ハイ信であろう。

〔6〕 この狛師の母がなぜ鬼になっていたのかはわからないが、さまざまな推察とともにもう一
つ思い出されるのは、奥州黒塚の鬼の話である。

〔7〕 黒塚は福島県二本松にいまもその旧蹟（きゅうせき）を残している。ここ阿武隈川（あぶく
まがわ）一帯に広がって、安達（あだち）が原とよばれていた大原野は、かつてはどれほど荒寥（わ
び）としてさびしい所であったろう。この原野の一つ家に住む老女が、道のゆききの旅人を泊めては
殺害し、物品を奪っていた、という。これだけでは鬼というより殺人強盗という方が当たって
いるが、土地の伝説はもう一つこれに人情劇的ドラマを加えている。

〔8〕 それによれば、ここに流離して住みついた老女は、もと都の公家に仕えた女であったが、
主家の幼君がことばを話せなかったため、これを何とか治したいと念じていた。ところが、こ
の（イ）特（とく）コウ葉（は）としては妊婦の腹にある胎児の生き肝（かん）しないと知らされ、この淋しい人目のな
い安達が原で、不運な妊婦の通るのを待っていたというのである。

〔9〕 何年かたったある日、都から親をたずねて下ってきた夫婦を泊めたが、老女はこの女が妊
娠（はら）しているのを見て喜び、男をだまして外出させ、ついに女を殺害してしまう。その後女のも
っていた守り袋からそれが成長したわが娘と知って、老女は狂気し鬼になり、人殺しをはじめ
るようになったというものだ。

「10」因果応報をまのあたり見せたような、芝居気のつよい創作的伝説だが、この劇のクライマックスはもう一つ用意されていて、その後那智(なち)の修験者東光坊がこの家に泊まり、屍臭漂う闇(ねや)の内の惨虐を発見したために、羞恥憤怒の極、鬼の性をあらわし東光坊を殺そうと追いかけるという、鬼への変貌の場面がおる。

「11」そして、われわれは、なぜかこの鬼伝説の中に盛りこまれた因果応報のすがたや罪深い女の心の動揺を見ることが以上に、ひたすらこの鬼への変貌の果敢な凄絶さに酔おうとするのである。B鬼への変貌——といった、そこに期待されているものは何なのであろう。

「12」われわれはたしかに、この老女の本性がはじめから鬼であったという解釈などは肯定しないだろう。老女はできるだけ平凡な、という以上に誠実な一女性であってほしいのだ。そして、そこから鬼への飛躍の中に、論理ではとうてい説明しがたい極限的な心情の混乱を、また、その生涯をこの一瞬に賭(か)け捨てるほかなかった追いつめられた心の解明を、鬼への変貌をとおして肯きたいと求めているのである。

「13」たとえばこの、黒塚の鬼女に象徴的に描き出されているような人生とは、いったい誰のために、何を生きたといえるものであろうか。老女が知らないでわが子を殺してしまった手のあやまちに狂気し、人殺しを重ねてゆく日々は凄絶であり無惨だが、それを見られたことの怒りと羞恥に思わず鬼へと変貌する刹那には、怖ろしいというよりはむしろ。哀しく美しい要素がまじっている。そこにわれわれがみるものは、屈折に屈折を重ねたはて、無為にひとしい生を、殺意にまぎらわしつ送っていた女の、激しい(注1)フラストレーションの爆発の姿である。

「14」この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉

鷹女

「15」これは好きな(注2)三橋鷹女(みつはしたかじよ)の句である。この句から連想されるのは、さしずめ紅葉狩の鬼女などが、絵画的な句のおもしろさのかげに、いくらでもひろげて考えられる情の世界は決して単一ではない。夕日にすぎとおる紅葉の色に身も染まりつつしだいに妖しく昂(たか)ってゆく心とは、なみなみの昨日今日の感情などではないだろう。

「16」たとえばまとわれているさまざまな肉親のきずなのため、よかれとのみ懸命に生きてきた(ウ)無シの人生のはてに、ふいに自覚された激しい自我が、表現を求めつつ昇華してゆく一瞬のおそれを不幸な女 of 精神史とともにみつめることもできるだろう。

「17」しかしまた、それでは現代において女の自我が、はたして充分にみたまされているかという、いささか(エ)タイ情に、自在に、(オ)カク散しがちな現代の自我は、しだいに稀薄化さえしはじめているようで、時にあの、古い女が鬼となっても遂げようとした激しい昇華の一瞬は、それゆえにいつそう魅力的なのではないかと思わせられる。

(馬場あき子「おんなの鬼」による)

(注) 1 フラストレーション——欲求不満。

2 三橋鷹女——一八九九〜一九七二。俳人。

3 紅葉狩——能などで演じられる、美女に化ける鬼の話。

問1 傍線部(ア)～(オ)は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)ハイ信
① ハイ物を利用する。
② 色のハイ合がすばらしい。
③ 祝ハイをあげる。
④ 勝ハイは時の運だ。
⑤ 歴史的なハイ景を探る。

(イ)特コウ薬
① 敵をコウ撃する。
② 新聞をコウ読する。
③ ダイエットに成コウする。
④ その件は時コウになっている。
⑤ コウ大な土地をもっている。

(ウ)無シ
① 初シを貫く。
② あの人が創シ者だ。
③ シ情を抜きにして尽くす。
④ 彼はシ野が狭い。
⑤ 世を風シする。

(エ)タイ情
① タイ用年数を越える。
② 長い話にタイ屈する。
③ 一週間タイ在する。
④ 未明にタイ勢が判明する。
⑤ タイ情なブレードだ。

(オ)カク散
① 影でカク策する。
② 運動場をカク張する。
③ 味カクが発達している。
④ 話がカク心に触れる。
⑤ 彼には品カクがある。

問2 右の文章は、内容のまとまりによって大きく三つの段落に分けてとらえることができる。それぞれのまとまりの説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 鬼女の導入的説明 — 鬼女の具体的事例 — 鬼女の将来的予測
- ② 物語に登場する鬼 — 伝説に登場する鬼 — 俳句に登場する鬼
- ③ 対極・円環の鬼女ドラマ — 因果応報の鬼女伝説 — 妖しく昂る鬼女俳句
- ④ 『今昔物語』に登場する鬼女 — 奥州黒塚の鬼女 — 紅葉狩の鬼女
- ⑤ 鬼と女のかかわり — 女から鬼への変貌 — 近・現代の女の自我

問3 傍線部A「一匹の鬼がひっそりと女の貌をして人間にひそんでいることは、一方からみれば哀しいことではあるが、一方からみれば、またたいへん怖ろしいことであるにちがいない。」とあるが、なぜ「たいへん怖ろしい」のか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 鬼は日常の世界とは異質な怪異の世界のものとして人間をさいなむものだから。
- ② 悲哀が深まれば深まるだけ惨虐なイメージが日常性を帯びることになるから。
- ③ 自らのうちにひそむ鬼の性が日常の世界を変貌させてしまうから。
- ④ 日常の世界が怪異の突然の出現によって脅かされることを示唆しているから。
- ⑤ 日常的なものが思いがけないものに変容する危険性をはらんでいるから。

問4

傍線部B「鬼への変貌——いったい、そこに期待されているものは何なのであろう。」とあるが、「そこに期待されているもの」とは何か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 懸命に生きながら、それが無為であったことを知った哀れな女が、激しく混乱し、瞬間的に鬼へと変貌するすさまじさ。
- ② これまで積み重ねてきた自分の人生を無にするものの出現に対し、激しく立ち向かう、哀しいまでの女の生き方。
- ③ 忍従を重ねてきた女が、これまでの人生を意義あるものに転換しようとして、鬼へと変貌する屈折した心理の動き。
- ④ 誠実に平凡に他者のために生きてきた女が、激しい自我に目覚め、新たな価値を求めて生きようとする果敢な姿。
- ⑤ これまでの無意味に流れた時間を悟った女が、運命を逆転させ、凄惨な鬼女に突如変貌するドラマチックな怪異性。

問5

筆者が、鷹女の句を引用しながら語ろうとしたことは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 模索を重ねる現代の自我に対し、忍従のなかに生きながらも精神的に充足されていた古い女たちの生き方を語ろうとしている。
- ② 夕日に映える紅葉に、瞬間的に鬼へと変貌する女の美しさや恐ろしさを象徴させた句を掲げ、女の性の不可思議さを暗示している。
- ③ 忍従のなかに生きてきた女の精神史を表すと解される句を示し、現代の希薄化し多様化した自我のありようと対比している。
- ④ 激しく自我を昇華させようとする哀しい女の吐息を描いた句によって、現代の解放された自我の多様性の意味を語ろうとしている。
- ⑤ 現代の女性の自我の強烈さを指摘し、紅葉と鬼に象徴される古風な女の、情念の純一な美しさと激しさを強調している。

問6

次の①～⑧は本文の読後感を話し合ったものである。この中から本文の内容に合致しないものを二つ選べ。順序は問わない。

- ① これまで鬼にはこわいというイメージしかなかったが、ドラマに出てくる鬼は決して非人間的なものばかりを宿しているわけではないんだよね。
- ② そうね、鬼は女とのいろいろなかわりを通して人間と交流していると思うわ。
- ③ そうした交流の中に、鬼の優しさや、懐かしさ美しさを見てとることができるような気がするよ、僕は。
- ④ ただ、そうした鬼への人間的な評価は、あくまでも因果応報のフィクションとしての鬼に対するもので、安定性のない、極めて面白いものと違うかな。

- ⑤ ドラマに登場する鬼は、女の優しさとは相いれないもののように考えられるけど、女が鬼に変貌するドラマにあるように、女と鬼の距離は、そう遠いものではないのよね。
- ⑥ ところで、僕らが鬼伝説に心を躍らせるのは、そのストーリー自体がおもしろいということだけではなく、なぜ鬼へ変貌しなければならなかったのかという、いつてみれば屈折した女のすさまじい身上にこそ目を見張らせるものがあるからなんだよ。
- ⑦ その女のすさまじい身上というのは、鷹女の句に詠まれているような、長い間積み重ねられて、そこから発散する激しい感情なのね。
- ⑧ その感情は、現代に生きる多くの女性の自我の芽生えを促していると言えるよね。